

日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解

野 呂 靖

一 問題の所在

鎌倉期に東大寺戒壇院を中心に活躍した学僧、示観国師凝然（一二四〇―一三二一）は、華嚴学綱要書といわれる『華嚴法界義鏡』二卷（以下『法界義鏡』と略記）をはじめとして、実に百二十五部千二百余巻もの著述を行い、そのそれぞれに、精緻な注釈を展開していることで著名である。^①これらの著作にみられる凝然の学風は、しばしば指摘されるように、一見して極めて公平・公正な印象を与えているといつてよい。しかし、その故か「彼の華嚴学は、法蔵と澄観の学説を指南としながら、あくまでもその範囲内において、教学を整備し体系化しているに過ぎ」^②ず、「彼独自の学風というものは見えない」^③とされるなど、その教学の独自性について、従来より疑義が示されてきた。また一方、こうした体系的な教学姿勢によって、「凝然によつて確定された華嚴学は、その後の日本華嚴宗の正系として後代に影響を与え」^④たとされるなど、鎌倉期以降の華嚴学は凝然によつて規定されたとの評価がなされてきた。

日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解

それでは、はたして凝然の教学は法蔵（六四三―七二二）・澄観（七三八―八三九）の学説を忠実に依用したに過ぎないのだろうか。（七三八―八三九）の学説を忠実に依用したに過ぎないのだろうか。

また、日本における華嚴学は、凝然以降、師説を継承するのみであったのだろうか。近年こうした観点から、藤丸要氏は凝然教学を再検討した結果、必ずしも凝然は澄観説を順守している訳ではないことを、^⑤また金天鶴氏は、三乗廻心説に対する日本華嚴諸師の見解を概観され、凝然やその門下においても統一した見解が存在していないことを示唆しており、^⑥これらは極めて重要な指摘と考えられる。

本稿ではこうした問題点を念頭に、華嚴学における成仏説の一つである「三生成仏説」に関する論義を取り上げ、諸師の見解を考察することを目的とする。

三生成仏説とはいふまでもなく、①見聞位②解行位③証入位の三生を経て成仏に至るとする華嚴学独自の成仏説であるが、日本華嚴においては三生の各生涯は「隔生」であるのか否かという点から事実上の「二生成仏説」が立てられ、さらには三生成仏説は円教の実義といえるのかという点にまで疑難が及んだことで、「三生成仏、

義門広博、開門尽旨不可率周^⑦と述べられて盛んな論義が展開されたと考えられるのである。

そこで本稿では、凝然における華嚴学の集大成ともいえる『華嚴五教章通路記』（以下『通路記』と略記）に紹介された三生成仏に関する「異説」を手がかりに、凝然の理解を検討し、合わせて凝然門下の諸師の見解とも比較すること、日本華嚴における成仏説の一端を明らかにしたいと思う。

二 中国華嚴学派における〈三生成仏〉解釈

中国華嚴学派における三生成仏説については既に多くの研究成果がある。^⑧ここでは日本華嚴の論義において重要視される典拠を中心に、いま一度確認したい。

中国における華嚴学を事実上基礎付けた智儼の成仏説は、既に指摘されるように、後世展開される種々の成仏説の淵源と成っている点で極めて重要であるが、三生成仏説についても例外ではない。

『孔目章』巻四では、『華嚴経』巻五八「入法界品」に、

善財、汝応^レ発^ニ大歡喜^一。不^レ久当^レ得^ニ大果報^一故。無量菩薩、於^ニ無数劫^一修^ニ菩薩行^一。汝今一生皆悉具得。

（『大正新修大蔵経』九・七七三頁上）

とある文に寄せて、次のような「疾得成仏」の五種の用例を説示し

ている。

依^ニ華嚴経^一疾得成仏、有^ニ其五種^一。一、依^ニ勝身^一一生即得。從^ニ見聞位^一後、一生至^ニ離垢定^一、後身即成仏。二、依^ニ見聞^一逕^ニ生疾剋^一。三、依^ニ一時^一疾得成仏。四、依^ニ一念^一疾得成仏。五、依^ニ無念^一疾得成仏。初義有^ニ四^一。一、依^ニ世界性等^一、十世界身輪王之子、現身成仏。如^ニ普莊嚴童子等^一。二者、依^ニ天子勝身^一、從^ニ三惡道^一出、生^ニ兜率天^一、現身成仏。三者、依^ニ閻浮提勝功德身^一、如^ニ善財等^一現身究^ニ竟普賢之行^一、後生即見^ニ仏^一。四者、依^ニ法華経竜女之身^一、南方成仏。義当留^ニ惑之身^一疾得成仏。二、依^ニ見聞^一逕^ニ生疾剋者^一、如^ニ初地中説^一、有^ニ三時益^一。一、聞時益。二、修行時益。三、転生時益。故地論云、是諸如来、加^ニ二護於諸菩薩^一。此人能聞^ニ持如^一是微妙法。此是聞時益、諸地淨無垢、漸次而満足、証^ニ二仏十種力^一、成^ニ無上菩提^一。此是修行時益。雖^ニ在^一於大海及劫尽火中、決定信^ニ無疑^一。必得^ニ聞^一此経。此是転生時益。三、依^ニ一時^一疾得成仏者、如^ニ善財童子於^ニ知識処^一一時之間獲^ニ普賢法^一。四、依^ニ一念^一疾得成仏者、如^ニ契^一普賢法^一一念即成仏。此依^ニ俗諦^一念也。五、無念疾得成仏者、一切法不^レ生。一切法不^レ滅。若能如^ニ是解^一、是人見^ニ真仏^一故。

（『大正新修大蔵経』四五、五八五頁下）

ここでは、一生成仏より無念成仏にわたる多様な成仏説が提示さ

れているが、このうち①勝身によって一生に成仏する立場、②『華嚴經』を見聞した後、生涯を経て成仏する立場の二種において、見聞し、修行し、転生し成仏するという時節が前提とされていることがわかる。したがって、「一生即得」といった「疾得成仏」とはいえ、事実上の「一生成仏」が想定されている訳ではなく、①「一生即得」の成仏説の事例に示される普莊嚴童子・兜率天子・善財童子・龍女であっても、実際には善財童子が現身に普賢行を具足し、後生に見仏するというように、すくなくとも「二生」の転生が想定されている。^⑨

一方、法蔵の『探玄記』には、兜率天子・善財童子などの生涯を明確に三生に配当する見解を見ることができ。

依レ円教宗ニ有二其三二位。一見聞位。則是善財次前生身。見聞如レ此普賢法ニ故、成二彼解脱分善根ニ故、如二歎德中弁ニ者是。二是解行位。頓修ニ如レ此五位行法ニ。如二善財此生所レ成至中普賢位ニ者是。三証入位。即因位窮終潜ニ同果海ニ。善財来生是也。

(『大正新修大蔵經』三五、四五四頁上)

これによって明らかなように、円教における成仏の階梯とは、①見聞し、②次生において五位の行法を實踐する境位に進み、③第三生目において果海に同じる、とする三度の転生に基づくというのである。『五教章』『行位差別』では、この三生の区別は「約報」の観

点から整備したと述べているから、前生の果報により次生に転生していく構造となっている。このように、智儼では「一生」とも「二生」とも考えられた普莊嚴童子・善財童子などの成仏への階梯が、法蔵においては「三生」と定義付けられ完成されたといえるだろう。^⑩

一方、伝法蔵撰『華嚴經問答』巻下には、

又孔目云、「華嚴經中成仏有レ五中、宝莊嚴童子等二人現身成仏等」。云何知二其相ニ。

答。宝莊嚴童子即現身中、值レ仏聞レ法得レ信ニ解自分勝進位諸三昧門等。即知レ成二信滿仏等ニ。又兜率天子等既現身中即得二離垢三昧少分、速諸功德等ニ。故知二現身成仏ニ。善財童子既現身至二普賢菩薩知識、而弥勒知識言、当来我成仏時、汝見レ我故、知二後生中成仏ニ。此等且約二文相、揆二見聞等三位為二三生ニ。故作二如レ是說一耳。約二實共皆同。但以二一身中成仏ニ。

(『大正新修大蔵經』四五、六一二頁上)

とあり、『孔目章』における善財童子等の成仏はあくまで「現身成仏」であり、「一身中」に成仏するとしており、「一生」或いは「二生」による成仏説が示されている。

また法蔵の三生成仏説を継承した澄観においても、

賢首云。応是善趣信行人。依二円教宗ニ有二其三二位。(中略)此

之一解甚順_レ經示。但更有_二一理。謂歷_レ位而修得_レ見_二普賢_一一時頓具。
 (『大正新修大藏經』三五、九二〇頁下・九二二頁上)

として、解行生上に「一時に頓に具す」とする解釈を示すことで事実上の「二生成仏」ともいえる解釈を付加している。^⑫

このように、中国華嚴においては智儼・法蔵の三生成仏説、澄観の二生成仏、或いは『華嚴經問答』所説の一生成仏説など多岐にわたる理解が示されているのであり、必ずしも一定の見解が示されている訳ではない。ここに、三生成仏説を受容した日本華嚴諸師において「円教の実義」とは何かという極めて困難な論義が展開される淵源が存在したと考えられるのである。

三 『五教章通路記』にみえる三生成仏に関する異説

(1) 凝然における三生成仏説理解の基本的立場

『通路記』巻四十には、『五教章』「所詮差別」に説かれる三生成仏説に関して、長文にわたる註釈が展開されている。ここで注目されるのは、華嚴宗における三生成仏解釈には「学者によって異解がある^⑬」とし、凝然当時に異説が存在したことを紹介していることである。

そもそも凝然において三生成仏説は、具体的に実践可能な「修行成仏」の立場として極めて重視されていたと考えられる。すなわち『法界義鏡』『修証次第』では、華嚴一乗の機根である「円教の根

機」が修する行位は、「行布門」と「円融門」の二種に分けることができる^⑭と規定しているが、「行布門」の断惑はさらに、①始教や終教といった三乗教の分齊に同じる立場と、②三乗教とは異なった「自教」すなわち円教独自の見聞生・解行生・証入生の三生を経るという「修行成仏」の立場があること、また「円融門」は「一断一切断、一成一切成」という「無碍自在」なる立場であり、十信位の満心に正覚を得ること、或いは四十一位の行位が相即することは、この円融門に依ると規定している^⑮。したがって、凝然においては、「円融門」では「一成一切成」といった「時節」に寄らない成仏説が配され、「行布門」すなわち具体的、段階的な「修行成仏」では、「三生」の生涯を経る必要があると理解していたといえよう。

ここで注意されるのは、法蔵では十信位での成仏を説く信満成仏であっても三度の生涯を経なければならぬとするように、三生成仏説の枠組みに組み込まれていた信満成仏が、凝然においては円融門の立場に配されていることである。すなわち凝然においては、三生成仏のみが行布門に配される段階的な「修行成仏」として理解されていたといえ、自ら「功業不_レ虚、必入_二果海_一而已^⑯」と述べた凝然が、現実的に修習可能な成仏説を選択した結果と考えられるのである。

(2) 『五教章』の文相と『通路記』の異説

そこで以下に凝然の紹介する『通路記』の異説を検討してみたい。

まず問題の淵源となった『五教章』の本文を挙げ、次に凝然の紹介する二説を比較する。

『五教章』「所詮差別」

二約報明位、但有三生。一成見聞位。謂見聞此無尽法門、成金剛種等。如性起品說。二成解行位。謂都率天子等、從惡道出已、一生即至離垢三昧前、得十地無生法忍及十眼十耳等境界。広如小相品說。又、如善財始從十信乃至十地、於善友所、一生一身上、皆悉具足如是普賢諸行位者、亦是此義也。三証果海位。謂如下弥勒、告善財言、我当來世成正覺時、汝當見我。如是等。當知。此約因果前後、分二位故。是故前位但是因位、果在後位、故說當見我。

(『大正新修大藏經』四五、四八九頁下)

ここで法藏は、因行に対する果報という「約報」の観点から階位を述べれば三生の段階があると述べている。まず第一見聞位は、「無尽の法門」を「見聞」することで金剛の種子を育むという段階である。第二解行位は、前生の果報により實際に修行を行なう段階であり、『華嚴經』「小相品」に説かれていた都率天子が悪道から脱け出て、一生のうちに十地無生法忍と十眼十耳の境界を証得したとする事や、「入法界品」に説かれる善財童子が一生・一身のうちに十信の境位から十地の境位までを修めたとする記述が、この生に配

当されている。第三証果海位は仏果に相当し、「入法界品」において、弥勒菩薩が善財童子に「我れ当來世に正覺を成ぜん時、汝當に我を見るべし」と告げたという經文に基づいて、因である解行位と果である証果海位を分位している。これに明らかなように、法藏において三生は、因行とそれに対する果報の論理によって、それぞれの生は全く獨立して存在しており、仏果へ至るには事實上、三度の転生を必要とするともみていたことになる。

第一説

一云、言三生者、隔生果報、非託法門。初見聞生、未聞一乘、唯是余業所感人身。於此報上、見聞一乘、修習觀解、成見聞種。於第二生、由前見聞、感解行報。於此身上、修習一乘。從初信位、乃至第十地。或是等覺。未起仏果加行已前、或第十地。未至勝進分位已前。皆名第二解行生報。解行之終、捨彼生報、於第三生、得勝果報。是最後身。即以此身、入果性海。即是第三証入生也。証果海已、真實妙果、唯仏与仏、乃能究尽。非余依身、因人所了。是故三生、皆是隔生。(『大正新修大藏經』七二、五二七頁上・中)

第一説は、三生を「隔報隔生」とみる立場であり、見聞・解行・証入のいずれも前生の果報によって生じるとする。そのため、解行生の終わりは等覺の段階であって、未だ仏果ではなく、第三証入生

の「最後身」を以つて果性海に没入するというのである。したがつて、この第一説は言うまでもなく『五教章』の「約報」の文相に則つた解釈といえよう。

第二説

二云、(中略) 見聞生者。必是業繫・苦縛之身。体、是有漏。未出三有、纏在界内。名之実業。所受之報解行生者、要離縛・界外無漏堅固之身。已出三有、遠捨苦依。其身、自在、其報、無礙。以法門為體、以定惠為相。雖是分段、法門故、縱在惡趣、是留惑故。故解行生、要棄前報。是故、初生即果報生。以是三界繫縛生故。第二即是法門之生。對彼界内・苦纏生故。若直約就界外、当体亦是果報。但用無礙。其第三生、即解行生滿位終心、即入果海究竟妙位。即是解行一生之内也。解行身上、無有死生。是故解行・証入二生、唯是一身相續上成。(『大正新修大藏經』七二、五二七頁中)

第二説は、解行と証入の分位は、果報によつて隔てられるのではなく、解行生は既に「法門」の分位であるという。すなわち、見聞生における身体は三界の繫縛によつて有漏であるが、解行生に受ける身体は分段身ではあるものの、無漏であるのでそのまま三界の繫縛を抜け出して悟りに至ることができる。このため、仏果の段階である証入生も「解行一生の内」に摂まり、「唯だ是れ一身相續の上

に成」じ、解行と証入は同一の身体の上で引き継がれるとみるのである。したがつて、第二説によれば、修行段階である第二解行生でいったん死を待つ必要はなく、第三証入生に「即入」できることになり、事実上、二生の生涯を経て仏果へ到達されることになる。しかし、これは法藏の所説とは異なつた解釈と言わねばならない。

(3) 凝然の見解

上記の二説に対し、凝然は次のように述べて自らの立場を表明している。

第三生者、唯是第二解行生終、万行円満、即入果海、無別果報感第三生。由此義故、応有難言。若解行終心、証入果海者、唯是二生、不成三生。若爾、何故、弥勒菩薩、告善財一言汝当見我。此意、証入心在当来。以自当成、告善財当成果故。故今、会云。為分因果二位行相、且言当来。而実解行終心、即入果海。

(『大正新修大藏經』七二、五二六頁下)

これによつて凝然が、解行生の万行が円満した段階で果海に即入するとみる第二説を支持していることは明らかだろう。ここで、第二説に「難言あり」とされるように、第二説に基づけば事実上「二生」で良いのであり、三生とはいえないとする疑難が生じるのは当

然といえる。また「入法界品」に弥勒菩薩が善財童子に対して「汝当见我」とした『華嚴經』の説相とも違背することになる。凝然はその疑難を踏まえた上で、「汝当见我」とする經文は因果の行相を分けるために説かれたに過ぎないと会通するのである。

ここで凝然は第二説の教証として、智儼撰『孔目章』卷四および法蔵の門人である文超法師の『遺忘集』を引用している^⑮。

孔目四云、「二者依天子勝身、從三惡道一出、生兜率天、現身成仏」^⑯（『大正新修大藏經』七二、五二七頁中）

文超法師遺忘集云、「未入地獄一已前、名見聞生。自獄而出、生直天上、空音属耳。随悔宿愆、得離垢三昧、名解行生。不離天处、見仏法身、名証入生。何以故。天子不改故。分段身故。（略）」^⑰（『大正新修大藏經』七二、五二七頁中）

これは、智儼が『華嚴經』「仏小相光明功德品」に説かれる兜率天子の話に基づき、疾得成仏の例として、「勝身に依つて一生に成仏する」とみた箇所^⑱に相当する。ここで注意したいのは、そもそも智儼は『華嚴經』の内容から、地獄の衆生が兜率天に生じ、天子と成り、そのまま成仏したとのみ述べるに過ぎないことである^⑲。しかし、『遺忘集』では、この智儼の説に法蔵の三生成仏説を読み込む

ことで、あたかも兜率天子は「解行生」において「兜率天を離れず」に、仏の法身を見た^⑳かのように解釈している。この『遺忘集』の理解は、既に法蔵滅後の段階において智儼説との会通が問題となつたことを示すものであるが、そのため凝然は、智儼と文超法師の説を、

既云「不離天处等」故、解行身成大覺位。『孔目』「生兜率天等」文、即就究竟果海為言。

（『大正新修大藏經』七二、五二七頁中）

とみることで、智儼が『孔目章』で言う兜率天子の「現身成仏」は、解行生と証入生の間に転生がないことを指す文証としている。しかし、そもそも智儼自身は三生成仏を立ててはおらず、兜率天子の現身成仏と関連させる訳ではない。また第二説に対する疑難は、「入法界品」における善財童子に関するものであり、直接の教証とはいえない。

なお凝然が加えて第二説の教証として用いるのが、次のように『華嚴經問答』であることは注目される。

問答下云、「（中略）故知、現身成仏。善財童子、既現身至普賢菩薩知識、而弥勒知識言、当来我成仏時、汝见我。故知、後生中成仏。此等、且約文相、提見聞等三位為三生故、

作_レ如是説_二耳。約_レ実共皆同。但以_二一身中成仏_一。(中略)。

〔已上〕。是故明知、以_二第三生_一為_二當報_一者、約_二就文相_一、寄_二分因果淺深之異_一。理実唯是解行身上証_二果海法_一・究竟覺位_一。

(『大正新修大藏經』七二、五二七頁中・下)

すなわち『華嚴經問答』では、『華嚴經』の文相に寄せて、善財童子を「後生中の成仏」というのであつて、「実に約さば共に皆同ず」るため、一身中に成仏する、と述べている。しかしここで問題となるのは、『華嚴經問答』自体が新羅華嚴において法藏に仮託して製作された文献であることであり、凝然自身、『通路記』巻六において本書を「如_レ是野言、或後人造_レ之、借名_二宗家_一」と厳しく批判し、偽撰と見ている^④。にもかかわらず、本書を教証とし、第二説を支持する凝然の見解はやや説得力に欠けたものと考えられるのである。

(4) 一身・一生成仏の否定

ところで、『華嚴經問答』の文によれば、「約_レ実共皆同」とあるように、見聞・解行・証入の三生がすべて一身上に展開すると見られるのではないか、という疑難が生じる。この点について凝然は、

此明_二解行証入之上生_一、唯是一身、非_二別隔生_一。是故文相為_レ分_二因果_一。扱_二実解行一身之上_一、即証_二果海_一。非_レ謂_二下見聞亦与_二解行_一、

唯是一生、不_レ隔_二異熟_一。故次文云、「言_二一身者_一、法性身等。即是界外解行身故」。明知、非_二彼見聞生_一也。

(『大正新修大藏經』七二、五二七頁下)

見聞之生、是煩惱身。要捨_二此報_一、受_二淨妙身_一。雖_二是分_一段、即是法門、非_二彼煩惑_一、所感苦報。解行之生、必成_二此身_一。故改_二見聞生_一、受_二解行身_一。是故定是隔生之報。非_二一身中有_二初二生_一。

(『大正新修大藏經』七二、五二七頁下)

と述べて、見聞生の身体は有漏であるため、見聞生を解行生に入れることは出来ない。また、『華嚴經問答』の文証は解行と証入について説く箇所であつて、見聞と解行は相続しないと否定している。したがって、凝然は「次第行布門」に属される三生成仏において、一生・一身といった極端な疾得成仏は決して容認しなかったと考えられるのである。

以上、凝然の三生成仏理解について検討してきた。凝然が示した論点とは、『遺忘集』『華嚴經問答』に基づいて、善財童子の「当成果」は因果の行相を示すために説かれたに過ぎないとみること、実際には解行生より証入生に至る段階に「死」は介在せず、分段身による証入が可能となるという点にあつたといえる。凝然のこうした理解の背景には、智儼の「現身成仏」解釈および『華嚴經』「入法界品」の記述と、法藏の所説とを如何に矛盾なく理解するかとい

う困難な問題があったといえ、結果的に『五教章』の文意と相違するにも関わらず、『華嚴経問答』を用いて第二説を支持した苦心がよくわかる。『通路記』と同様の見解は、『華嚴孔目章發悟記』や『華嚴五十要問答加塵章』^{②③}においても見られることから、凝然の立場が一貫して第二説にあったとみて差し支えないだろう。したがって、『法界義鏡』において重視された三生成仏とは、第二解行生における成仏を意味する、事実上の「二生成仏」を指していたと考えられるのである。

〔図表一〕凝然の三生成仏説理解



四 凝然門下における三生成仏説に関する論義

凝然が整理し結論づけた三生成仏に関する異説は、聖憲（一二三〇七―一二三九二）が「此ノ事論議也」^{②④}と述べたように、凝然門下の学僧においても再び論じられる問題となった。^{②⑤}このうち三生成仏説に関する言及がみられる審乗（一二五八―一二三三三）・憺爾（一二二五―一二三二五）・湛睿（一二七一―一二四五）・盛誉（一二七三―一二五二）・聖憲・実英（一二五三―一二六三七）の諸師について、そ

日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解

の見解を探ることにしたい。

（1）一生・二生成仏説の展開

a) 審乗の見解

審乗は凝然門下の随一の弟子であり、凝然存命中の正和二（一二三三）年に撰述された『華嚴五教章問答抄』によつて、その見解が知られる。

十六。問。解行証入之生者、隔生歟。答。云云。兩方也。若云。隔生者、別教心、以分段身直至仏果。円機何至十地因満、可有二分段隔生歟。是以孔目章中、普莊嚴童子等、現身成仏之機定。若依之云。不隔生者、既云約報。若不隔生者、約報但二生也。何可云三生歟。是以善財童子証果、新旧二經共在於当来見。加之大威光太子、於第三仏所成就普賢行了、命終生須弥山上天宮見。何況大威光太子者、毘盧舍那、乃往過去之本事也。知証果在後云事。如何。答。善財証果当来者、三生行布之義相也。若約円融實義者、既初發心時証入了。又威光太子、於第三仏所成就普賢行畢、後作切利天王。又詣第四仏所得三昧等。云云。是即解行生中自在受生之義也。非解行証入之隔生之義也。

（『大正新修大藏經』七二、七〇九頁下・七一〇頁上）

ここで問題とされるのは、第一に解行生と証入生が隔生というならば、別教においては分段身のまま直ちに仏果に至り現身成仏することを説いているのであり、円教の機根においては分段隔生はないと考えられること。第二に、隔生ではないというならば、第三生は「約報」とはならず「三生成仏」となるという疑難である。

これについて、善財の証果が当来にあるという文は三生の行布門の義相であり、円融の実義においては初発心時に証入する。したがって、解行と証入とは隔生ではないと結論づけている。このように審乗は凝然と同様に第二説を継承していると考えられるが、ここで注意されるのは、そもそも凝然においては行布門に配当されていた三生成仏説を、解行・果海を隔生と見る立場を行布門とし、第二説を円融門に配していることである。²⁶⁾したがって、「三生成道者、別教本意歟」との問いに対しては、『華嚴経問答』に「但從三乘位作如是説耳」とあるのを受けて、三生成仏説は別教の本意ではないと結論付けている。

b) 盛誉の見解

第二説を継承した学僧に、泉州久米田寺に止住して第二世となった盛誉が挙げられる。その論義抄である『華嚴手鏡』一卷には、全三十条の論義テーマが収録されているが、このうち「七、三生別教」「八、三生隔不」「九、現身成仏」の三条が三生成仏に関連した議論となっている。

問。円教意、付レ明三生成道、於解行証果海、可有隔生義耶。答。云云。両方。若云隔生者、從解行因滿位証入果海之人、何可有隔生之義哉。是以善財莊嚴等、現身成仏人、所不見有隔生義也。若依之爾者、正見經文、弥勒善財云、「於此命終已、得諸勝妙果、昇入仏法堂」
 文。既云於此命終。有隔生義事分明。如何。答。凡別教一乘意、以分段身直至仏果。何至十地因滿可有分段隔生哉。或但於善財童子、於此命終等之經文者、且為顯三行布之差別、約因果前後、所説果在當来也。

(『大日本仏教全書』十三・四五九頁上、四六一頁上)

ここに明らかなように、盛誉は審乗と同様の論理に依っている。すなわち別教一乗では分段身のまま仏果に入ると見るべきで、分段身を隔生すべきではなく、弥勒菩薩の「於此命終已」の文は、「行布差別」の立場によって因と果を分けていと述べている。そして、円融の実義によれば初発心時に証入するのであつて実報の隔生はないと結論付ける。²⁷⁾

さらに盛誉は、智儼が示した四類の「現身成仏」の人においても、①「解行の因滿の大士」が「離垢定前に至る」と説かれるに過ぎないこと、②善財童子においても証果海を当来に置いていることなどから、いずれも現身成仏とはいえないとする疑難を取りあげているが、円教の意では「因果同体」が原則であるから因を得れば必ず果

を得るのであつて、「至_二十信終心_一、因位既成故、必尅_二同体之果_一、云_二現身成仏_一也」と述べている。²⁸⁾

c) 聖憲の見解

こうした解行・証入を隔生とみない立場を円融門に配当し、三生隔生説を別教の実義と認めない審乗・盛誉の見解をおし進めれば、三生という生涯の区別自体が軽視されることにならう。聖憲撰『五教章聴抄』卷上(以下『聴抄』と略記)には次のような問答がある。

問。此三生成仏円教実義也哉。答。此事論議也。三生成仏普法

正意歟云尋也。答_レ之_二様_一。常非_二正意_一。一位撰_二一切_一。故見聞生終成仏畢。実重可_レ経_二解行生_一成仏可_レ有_二勝劣_一哉。故知、三生者終教因果前後准三生建立也。故至相釈云、「但從_二三乗_一作_二如是説_一」_レ文。華嚴問答云、「此等、且約_二文相_一、提_二見聞等_一三位為_二三生_一故、作_二如是説_一耳。約_レ実共皆同但一身中成仏」_レ文。普法実意、可_二一生成仏_一也。

(『大日本仏教全書』十二、一二九頁下)

ここでは、三生成仏説は円教の実義であるかとの問いに対し、「常には正意には非ず」として、見聞生の終わりに成仏し終わるのであつて、それは解行生を経た後の成仏とも勝劣はない、と述べている。そして、智儼の『孔目章』と『華嚴経問答』を教証に、三生

日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解

を立てるのは終教の説相に準じて立てているのであり、普法華嚴一乗の実意では一生成仏である、と結論付けている。注意されるのは、凝然においては一生・一身成仏を否定する根拠に依用されていた『華嚴経問答』『約実共皆同』の文が、ここでは逆に一生成仏の教証として用いられている。このように、聖憲に至つては遂に「見聞生」における一生成仏こそが「実意」であるとの極端な見解まで出されるのである。

以上のように、凝然門下における二生(一生)成仏説の論点とは、全面的に『華嚴経問答』の所説に基づくことで、三生の階梯自体を円教の実義ではないとする点にあつたといえる。しかしながら、法蔵の示した三生成仏説とは上述のように「依_二円教宗_一有_二其三位_一」と規定されていたのであり問題が残る。にもかかわらず第二説は、『聴抄』に「南都古来之一義」²⁹⁾と述べられているように、日本華嚴において極めて有力な学説として継承されたことが知られるのである。

(2) 日本華嚴における三生隔生説

a) 湛睿の見解

一方、凝然以降、展開されてきた一生・二生成仏説に対し、凝然門下においても三生隔生を実義とみる見解が存在したことは、『聴抄』に「一義云、隔生也。(中略)此義ハ宗性僧正ノ義トテ久米田寺円戒房、死_レ此生_レ彼、被_レ立ケリト」³⁰⁾とあり、円戒房禅爾

が隔生説の立場をとっていたことより確認できる。ここで凝然の華嚴学の師である宗性（二二〇二―一二七八）が隔生説を立てたと証言されていることは極めて興味深いが、禪爾の見解と合わせて、その詳細を知ることができない。そこで注目されるのが、禪爾の立場を継承したと考えられる湛睿の見解である。湛睿の弟子靈波による『五教章見聞鈔』には、「解証果海隔生ナル歟ノ事」と題された次のような論義が収載されている。^⑪

四十五。問。章云「約報明位、但有三生」へ文爾者、

解・証果海、隔生歟。答。師云、爾也。難云、豈於等覺位一死

始感妙覺生歟。答。以等覺智斷仏果障時、此無間道位開

普見肉眼菩薩、即父母所生肉身也。然無間道滅解脫道生位、

得無漏無相普眼。更是非父母所生身可心得也。今、証果

海生者是也。（『大正新修大藏經』七三、一五三頁下―一五四頁上）

師云、所詮隔生者、依果報不同所論也。爾有為無為既各別

故、不可云一生。漏・無漏亦不同故、不可云一身也。

既於等覺位中。無間道位因位果報捨。豈是非死耶。解脫道位

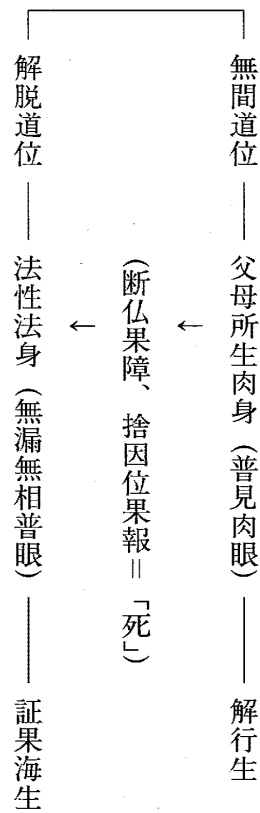
果報既現生。豈非生乎。是故隔生云義理、更不可疑者歟。

若如所難者、以火焚燒等、豈謂非死乎。

（『大正新修大藏經』七三、一五四頁上）

すなわち等覺位において仏果障を断じるに際し、無間道の段階では父母所生身であり、これは解行生にあたる。しかし、解脫道に生じ無漏無相の普眼を得た段階は父母所生身とはいえず、ここが証果海生となる。よって、有為・無為は各別して見るべきであり、既に等覺位において因位の果報は捨てているのであるから、これを「死」とみなすべきという。すなわち湛睿は、凝然が支持した隔生を否定する第二説を退け、隔生説を「更不可疑者歟」と述べて支持していることがわかる。

〔図表二〕湛睿の隔生果報説



b) 実英の見解

湛睿の見解を継承したのが、江戸時代初期の東大寺僧実英による慶長一七（一六一二）年から寛永一四（一六三七）年の二十六年間に行なわれた春季談義の稿本『五教章不審』である。本書では三生隔生の問題が長文に涉って取りあげられているが、非隔生説に対し、隔生でなければ二生成仏になると批判して「既因位果報ヲ別尽シテ

法性真身ヲ別生スルカ故、是ヲ証果海ノ生ト云也。於果報因ト果トノ二報即各別也^②と述べ、果報においてさらに因・果が隔別されると結論付けている。本書において注目されるのは、「**本寺義**」三生共隔生故、三生果報云。**末寺義** 見聞解行果報也。証果海法門生也」とされ、三生を隔生とみる「約報」の立場は「本寺の義」であり、見聞・解行のみを果報とし証果海を法門の生とみるのは「末寺の義」と示されていることである。これによって、実に近世においては凝然の支持した第二説ではなく、三生隔生説こそが「東大寺義」として認定されていたと考えられるのである。

さて、上述の検討によつて判明した諸師の見解を図示すれば次のようになる。

〔図表三〕 日本華嚴諸師における三生成仏説

人物	著作	見解
宗性		隔生説
凝然	『通路記』	二生成仏説
審乗	『問答鈔』	二生成仏説
禪爾		隔生説
盛誉	『華嚴手鏡』	二生成仏説
聖憲	『聴抄』	見聞生一生成仏説
湛睿	『纂釈』、『見聞鈔』	隔生説
実英	『不審』	隔生説

五 おわりに

以上、凝然の理解を中心に、日本華嚴における三生成仏説解釈の展開を概観した。

凝然における三生成仏解釈は、「約報」の観点から三生を隔生とみる法蔵の解釈ではなく、解行生を法門の分位とみることで、分段身のまま果海に証入できるとする特異な立場であった。そのため二生の生涯を経た段階で、父母所生身による成仏が可能となっている。このように、凝然の成仏説に対する態度は必ずしも法蔵の所説を忠実に依用する訳ではなく、『華嚴経問答』によつて会通を試みてはいるものの、『華嚴経』自体の説相や「宗家」である法蔵の解釈とは結果的に異なる見解といえる。凝然門下の学僧においては、こうした立場を更に進め、『華嚴経問答』に依つて隔生説を行布門とみる審乗・盛誉の二生成仏説、さらには聖憲の見聞生上における一生成仏など極めて短縮化された成仏説が有力な見解となっていたことが知られるが、凝然門下であった湛睿が師説を継承するわけではなく、近世には「本寺義」と認定されるに至ったことは鎌倉期以降の日本華嚴が必ずしも凝然説によつて確定された訳ではなく多様な「異説」が併存していたことを意味するであろう。

それではなぜ三生成仏説が鎌倉期以降の華嚴宗において盛んに論じられ、凝然以降、二生成仏説が支持されたのか。こうした思想的背景や、東大寺図書館所蔵の短釈類については検討することができ

なかつた。この点は今後の課題としたい。^③

(本稿は平成十七年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。)

註

- ① 『諸宗章疏録』『戒壇院国師凝然撰集』(『大日本仏教全書』一、一八頁下) 参照。
- ② 北畠典生「凝然の生涯と教学姿勢について」(『宗教的真理と現代』一九九三、四六七頁)
- ③ 島地大等「凝然大徳の教学」(『日本仏教教学史』一九三三、四二三頁)
- ④ 鎌田茂雄「法界義鏡の教理史的意義」(『禅学研究』五八、一九七〇、六二頁下)
- ⑤ 藤丸要「凝然の禅宗観に関する一考察」(『中央仏教学院紀要』七、一九九〇) 参照。
- ⑥ 金天鶴「日本華嚴における三乘廻心説」(『印度学仏教学研究』五一・一、二〇〇二) 参照。
- ⑦ 凝然『華嚴五教章通路記』(『大正新修大藏經』七二、五二七頁下)
- ⑧ 華嚴宗の三生成仏説に関しては、古くは河野法雲氏をはじめ多くの研究が行われており(河野法雲『三生成仏』『華嚴五教章講義』一九一三、石井教道『第式項 三生成仏論』『華嚴教学成立史』、一九六四)、智儼・法蔵の解釈および『通路記』の異説の概略が紹介されてきた。ただし、いずれもその解釈の当否を判定する点に重点が置かれており、凝然やその門下における思想的変遷など立ち入った検討は残されている。なお、中国華嚴学派における三生成仏説については吉津宜英氏および中村薫氏による研究に詳しい(吉津宜英『華嚴禅の思想的的研究』大東出版社、一九八五・中村薫『華嚴經』に顕われたる童子について―特に普莊・地獄・善財の三童子を中心に―『東海仏教』三三三、一九八八)。また近年、馬淵昌也氏は智儼・

法蔵以降の中国華嚴学派における三生成仏説の受容について詳細な分析を行っている(『唐代華嚴教学における三生成仏論の展開について』『駒沢大学仏教学部論集』二六、二〇〇五)。本稿では以上の研究を参照した。

- ⑨ ただし、智儼自身はこうした「時節」に則った成仏説を至要と位置づけた訳ではなく、一念成仏や無念成仏、或いは多劫成仏など多様な成仏のあり方を包含した立場に特徴が認められる。智儼の成仏説については、木村清孝著『初期中国華嚴思想の研究』(春秋社・一九七七)、吉津氏前掲書、および馬淵氏前掲論文を参照。
- ⑩ 『大正新修大藏經』四五、四八九頁下
- ⑪ この点を吉津宜英氏は、「この三生成仏は転生を当然の人生観としている『華嚴經』の教えから必然的に出てくるものであるが、『三生』でよいという明文は『華嚴經』には存在しない。むしろ『華嚴經』の説相をみると、修行の成就には少なくとも三生はかかるはずだという、内容上の整理の結果導き出されたものであろう。」(前掲書、九五頁)と指摘されている。
- ⑫ 馬淵氏は澄観の理解について「彼が三生成仏説を受け入れながら、実際的には『二生成仏』ともいうべきものを認めてゆく姿勢を示したということである」と指摘されている(前掲論文、二五七頁)。
- ⑬ 問此之三生。為三皆約隔生果報。為不爾耶。答三生報法。学者異解。是故順彼等三解釈。
(『大正新修大藏經』七二、五二七頁上)
- ⑭ 『大日本仏教全書』一三、二一九七頁
- ⑮ 問。円教断惑、其相云何。答。一乘断惑、有二門。一行布断惑。二円融断惑。行布門断、同三乘教。於中、或全同始教。如十地品所説行相。或大同終教。如信非位、断惑亦爾。此約寄同余教。為正言。若依自教、即有行布。広明規模、事、異三乘。如彼見聞・解行・証入。三生之中、撰因果位、并明修行成仏相等。
(『大日本仏教全書』一三、二九八頁下)

①⑥ 若円融門、此相即融、一断一切断、一成一切成。位位成仏、無礙自在。一乗教中、即自説言、惑障不_レ分_二分別・俱生_一、不_レ立_二二現行・種子・習氣_一。唯一惑障、一障一切障。以_レ障_二一法一切法_一故。是故断時、一断一切断。証時、即是一成一切成。如是断証天超_三三乗_一、信位満心、得_二此事_一。四十一位位断証、前撰_二後後_一、後撰_二前前_一、中撰_二前後_一、前後撰_二中_一。随説即得、無_レ有_二塞滯_一。即是円教断惑行相。

(『大日本仏教全書』一三、二九九頁下)

①⑦ 『華嚴孔目章発悟記』卷十一奥書(『凝然大德事跡梗概』一九七頁)本書は正しくは『随聞要科自防遺忘集』といい、『華嚴経義鈔』と

①⑧ いう題名で第十卷のみ金沢文庫に現存する。高峯了州「文超法師の華嚴経義鈔について」(『華嚴論集』国書刊行会、一九七六)参照。

①⑨ 『大正新修大蔵経』四五、五八五頁下

②⑩ 木村清孝氏は「經典自体においては、地獄の衆生が兜率天に生まれて天子となることと、業報の空を開示する教説によつて限りなく多くの世界の兜率天子がさとりを得ることとは別の主題である。智儼は、そうした二つの主題をつなぎ、「一生即得」「現身成仏」と一氣に読み切るのである」として、智儼の解釈と經典そのものの内容の相違を指摘されている(木村氏前掲書、五八九頁)。なお兜率天子の事例は、『華嚴経』卷三二(『大正新修大蔵経』九、六〇五頁上(六〇六頁下)に拠る。

②⑪ 此問答二卷題下云。法蔵撰。然文言卑拙。句逗雜乱。不似賢首常途章疏文言句逗。賢首大師。所製文章。簡而又要。精而又美。随讀得意。随解領旨。教章。玄記。旨歸。綱目。梵網戒疏。門論疏等。皆此類也。至密嚴經疏。文言少異。四字成句。事無混濫。要妙精雅。中正冷焉。今此問答。与彼相反。俚而又野。難言祖文。(中略)如是野言。或後人造之。借名宗家。(『大正新修大蔵経』七二、三三三頁下(三三四頁上)本書の撰述問題については、石井公成「華嚴問答」の著者」(『印度学仏教学研究』三三二、一九八五)参照。

②⑫ 『華嚴孔目章発悟記』卷四(『大日本仏教全書』七、三〇四頁下)

②⑬ 『華嚴五十要問答加塵章』卷一(『大日本仏教全書』一三、四二〇頁下)

②⑭ 『大日本仏教全書』十二、五三二頁下

②⑮ 凝然門下の相承については、島地大等前掲書、納富常天「湛睿の華嚴教学」(『南都仏教』三九、一九七七)、同「久米田寺盛譽について」(『華嚴学論集』所収、一九九七)参照。

②⑯ なお、審乗の示した隔生説を円融・行布の二門に相配する解釈は、鎌倉初期の東大寺僧聖詮による『華嚴五教章深意鈔』に既にあることができる(『大正新修大蔵経』七三、一三三頁中)。すなわち『深意鈔』では、善財童子、普莊嚴童子は現身成仏したといえるのかとの問に対し、現身成仏ということは「一宗の大意」とし、善財の証果が当来にあるとする難については、これは「行布の次位」によつて因と果を隔てているのであり、『華嚴経』の正位ではないとする。

②⑰ 『大正新修大蔵経』一三、四五九頁下

②⑱ 答。依_二円教意_一、得_二因必得_一果。若不_レ得_二果者_一因即不_レ成、以_二因果同体_一故。其果者、究竟自在円融果也。至_二十信終心_一、因位既成故、必尅_二同体之果_一、云_二現身成仏_一也。是以宗家并_二十信終心作仏得果之義_一、但因位満者勝進即没_二於果海中_一也。為_二是証境界_一故、不可説耳。是如_二竜女及普莊嚴童子・善財童子・兜率天子等_一へ文。於_二十信終心_一、尅_二第三生果_一、云_二現身成仏之旨分明也_一。但於_二或云_一離垢定前、或云_二果置_一当来_二等難_一者、約_二因門一_一辺、如_二此説_一之也。(『大日本仏教全書』一三、四六〇頁上・下)

②⑲ 『五教章聴抄』(『大日本仏教全書』一三、五七四頁上)

③⑰ 『五教章聴抄』(『大日本仏教全書』一三、五七四頁下)

③⑱ へ三生成仏に關する湛睿の立場を示した資料には①『五教章纂釈』「二約報明位但有_二三生事_一」および②弟子靈波による湛睿の講義録『五教章見聞鈔』が現存する。ここでは、より湛睿の見解が明確な『見聞鈔』論義第四五を用いたい。

③⑲ 『大正新修大蔵経』七三、一三八頁中・下

③③ 『大正新修大藏經』七三、一三八頁中)

③④ こうした分段身による証入という見解は、天台密教系統の即身成仏に関する議論においても、「一生成仏という場合に生身を捨てることなく仏身を成じ得るのか否か」という点から、「生身の捨・不捨」として類似の問題が取り上げられている(大久保良峻「円仁の即身成仏論 特に生身の捨・不捨について」(『天台教学と本覚思想』法蔵観、一九九八)。また真言密教において華嚴の三生成仏説が「隔生説」と見られていたことは、中性院頼瑜が華嚴に即身成仏ありとする「有疑」を、三生成仏を隔生説と見ることと破斥していることより明らかであるが(『即身成仏義顯得鈔』卷上、『真言宗全書』十三、十三頁下り十四頁上)、他宗より即身成仏説とも見なされ得る展開を取っていたことが推知される。実際に、聖憲が示した見聞生一生成仏説は事実上「即身成仏」ともいえる内容となっている点は注意されよう。